

氏 名 高内 正子 (たかうち まさこ)

最終学歴 聖和大学大学院教育学研究修士課程幼児教育学専攻修了

学位 教育学修士

修士論文題目 「健康教育の歴史と変遷—ジョン・ロックに発して—」



主な職歴

- 1971年 関西労災病院小児病棟勤務 (至1974年 3 月)
- 1974年 4 月 ICU 病棟勤務
- 1975年 4 月 ICU 病棟主任看護婦 (至1976年 3 月)
- 1988年 4 月 神戸保育専門学校非常勤講師 (小児保健実習担当) (至1994年 3 月)
- 1989年 4 月 聖和大学非常勤講師 (小児保健実習担当) (至1991年 3 月)
- 1991年 4 月 聖和大学教育学部専任講師
- 1997年 4 月 聖和大学教育学部准教授
- 1997年 8 月 米国テネシー州立メンフィス大学客員研究員 (至1998年 8 月)
- 1998年 4 月 武庫川女子大学文学部非常勤講師 (小児保健実習担当) (至2006年 3 月)
- 2002年 4 月 武庫川女子大学文学部非常勤講師 (小児保健担当) (至2007年 9 月)
- 2006年 4 月 聖和大学教育学部教授
- 2008年 4 月 関西学院大学教育学部教授 (至現在)
- 2011年 4 月 伊丹市立保育所ポピンズナーサリースクール運営委員 (至現在)
- 2012年 4 月 園田学園女子大学児童教育学科非常勤講師 (至2016年 3 月)

主な著書・論文

1. 小児保健実習 (分担執筆・編著) 保育出版社 1996年
2. 新乳児保育への招待 (分担執筆・編著) 北大路書房 2009年
3. 子どもの保健演習ガイド (分担執筆・編著) 健帛社 2011年
4. 心とからだを育む子どもの保健 I (編著) 保育出版社 2012年
5. ICU における患者管理の実際 I 呼吸管理 重症破傷風患者の 1 case を通じて 1975年第 1 巻第 9 号臨床看護 (共著・筆頭著者) pp99~105
6. Tennessee, South Korean, and Japanese Early Childhood Educators' Toward Death Education for Young Children Dixie R Crase, Darrell Crase, Heesun Lee, and Masako Takauchi Tennessee Educational Leadership Spring 2000/VolumeXXV II Number 1 pp3~7 (Joint author ship)
7. 保育所における乳幼児の健康調査—西宮市の調査から (単著) 2001年 保育と保健 pp66~72
8. 幼児に対するいのちの教育 絵本を通じての一考察 (単著) 乳幼児教育学研究 2005年
9. 死の病のウサギをめぐっての一考察 (単著) 関西教育学研究紀要第 8 号 2008年
10. 保育の中で「いのち」を考える 日本保育学会会報第161号 P2 (単著) 日本保育学会依頼原稿 2015年

小児病棟で、出会った子ども達から教えられたこと

高 内 正 子

私は、もともと小児病棟の看護婦として、働いておりました。常に医師の指示の下に働かなければならない看護の仕事の在り様に、かなりの不満を持ち続けており、3年我慢をして働き、ついに辞表を看護部長のところに申し出て行くと言われ、東京の日本看護協会に研修を受けに行き、ついでに労働福祉事業団の主任試験も受けて来なさいとのことであり、与えられた課題をクリアするべく東京で4か月間学生生活をし、主任試験も受験して帰り、その試験に落ちたと思っていたら合格しておりまして、翌年すぐにICU病棟の主任となりました。

主任になろうと婦長になろうと、看護婦は看護婦であり、医師の指示の下に働くと言うことには変わりがないと考え、当時イライラしていた私をもう退院するからと訪問してくれた小児病棟の5歳の男児を見て、やはり「私は子どものことを学びたい。」と、退職を決意し聖和女子大学を受験し直しました。その当時は、看護婦時代の経験を活かすなどと言うことは全く考えてもなく看護婦を辞めて、子どものことを学びたいと聖和大学に入学した私は、まさか大学で教鞭を取ることを仕事とするなど夢にも考えておりませんでした。聖和大学を卒業する時期に当時の山川道子学長先生から、「折角看護婦の資格と専門知識を持っているのだから、子どもの健康教育について研究しなさい。」とご指導頂き、聖和大学大学院へと進むことになりました。修士論文の指導者は、フレーベル研究で著名な庄司雅子先生でした。看護経験を振り返るとどうしても、小児病棟で出会った子ども達のことを思い出され、その代表者の子どもは3名程ですが、紙面の都合上2名のみ紹介させていただきます。

看護婦として、就職したばかりの小児病棟で、私が初めて看護婦らしい仕事をした時のことを今も忘れることができません。「看護婦さん（当時は今のようになんて呼ばれていませんでした。）おしっこ！」とよしきちゃんが訴えてきました。私は心の中で、「そうそうこの子はネフローゼ症候群で、一日の尿量を測らなければならないのだった。」と思いながら、「どうすればいいの？」と聞き、「尿瓶（しびん）を取って欲しい。」とよしきちゃん。手渡すと、彼

は上手に尿瓶の中に排尿し、私に手渡し、私が戸惑っているのを察知して、奥の方に歩いて行き、「○○田よしき」と、大きな声で言うことができました。その奥の台には尿を溜める大きな三角形の硝子の瓶が複数並んでおり、黒マジックで明確に名前が書かれていました。「○○田よしき」を見つけて私は、その瓶の中に尿瓶の尿を入れ足しました。その後、「ここで洗ったら終わり。」と教えてくれました。ネフローゼ症候群は、その当時も今現在もステロイドホルモン剤を長期にわたって投与され、患児に副作用が鮮明に表れるものです。よしきちゃんも典型的な副作用が現れており、顔はムーンフェイス（顔が丸くなる症状）となり、全身が毛深くなり眉やもみあげの部分も毛深く、まだ3歳なのに本当にしっかりとっていて、私は彼のお蔭で一人前の看護婦として歩み始めることができたのでした。

もう一人忘れてはならない男子中学生の患者さんがいました。彼は桜井君と言って、中学校3年生の利発そうなクラス委員長をしている14歳の今で言うイケメン男子でした。病名は急性リンパ性白血病で、予後不良との申し送りでした。常に回診の時には小児科の部長から「早く良くなって中学校に戻らなあかんねえ。」と言われ、まじめな彼は「はい、頑張ります。」と良い返事をするのを見てみると、こちらもつらくなってきて、「そんなこと応えなくても良いのに。」と何度心の中で叫んだことでしょうか。私なら「今の間に会いたい人に会って、今の間に楽しい時間を持ってね。」とどれだけ伝えたいのかと。当時の遅れた回復の見込みのない患者さんに対しての医療の進め方には、悔しい思いしか残っていません。この事例も私が「いのちの教育」の研究を目指すきっかけの一つとなったのかも知れないとも思っております。

大学教員としての活動は、私一人ではできませんでした。キャンパス管理室の皆様や、その他図書館・事務の皆様・様々な職種の方々に支えられ、良い環境の中、私達は学びを進めることができています。私自身の研究生活を支えて下さいました、多くの関係者の皆様に心より感謝の気持ちをお伝えしながら記述を終えさせていただきます。